青少年赤十字
賛助ひろしま
第10号
2004.12.

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手をとりあい、研鑽に努める。

発行　広島県青少年赤十字賛助奉仕団　〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
事務局　日本赤十字社広島県支部　TEL（082）241－8811

平成十六年度全国青少年赤十字賛助奉仕団

広島県委員長　**塚本晃史**

十月七日・八日に日赤本社で協議会総会と四十周年記念行事が全国から百名が参加し盛大に開催された。

〔審議された平成十六年度事業計画〕

一　賛助奉仕団活動の実践
　1　指導者協議会との連携
　2　青少年赤十字加盟の促進
　3　地域及びその他の奉仕団との連携
　4　赤十字思想の普及
　5　各種研修会への支援
　6　ブロック会の充実

二　会報「いとすぎ」第十号の編集と発行
　第三ブロック担当・静岡県主管

三　役員会開催　一回・二回

四　平成十六年度総会及び創立四十周年記念事業
　いとすぎ創立四十周年記念誌が出版され全会員に配布される

〔ブロック会での話し合い〕

。島根県の新規加入によって第五ブロック中・四国全区加盟完了

。平成十七年度ブロック会
　愛媛県・松山　七月十一日～十二日

。「いとすぎ」十号　内容分担は決定ずみ

。会費…全国負担金の値上げについて現況二〇〇円をさしあたって第五ブロックとしては三〇〇円とするよう提案する。
。各県の活動報告
〔全体会〕
。ブロック毎の報告
。加盟促進の方途と課題
。他の奉仕団と連携の方途と課題
＊地域の状況で随分温度差が感じられた。

第五ブロック〔中国四国〕賛助奉仕団連絡協議会報告

世木田　寛子

五月三十一日、六月一日広島県廿日市市日本赤十字広島看護大学で開催した。

今回は、三〇人余りの参加者があったことに加え、全県揃っての会になったことが印象的であった。

開会行事では、塚本晃史会長の挨拶に続き、日赤広島県支部組織振興課長、脇谷孔一氏が歓迎の挨拶と同課振興係長、角田敦彦氏の紹介があった。引き続き、幼・小・高校のすばらしい実践発表と、角田氏の現状報告がなされた。閉会し、宮島に場所を移し、宿泊をかねた懇親会となり、大変有意義な会となった。

実践発表と現状報告の要旨は、次のようなものであった。

実践発表

●幼児と青少年赤十字（こども赤十字）と題して社会福祉法人光生会理事長、元初神保育園園長　光本凉子氏の発表

幼児と教育の特質、広島県青少年赤十字の加盟の話に続き、保育とこども赤十字の実践目標を照らし合わせての実践を組み立てられていく様子を苦労談を交えたものであった。中でも、創造活動にいたっては、こども赤十字のやくそく活動目標を家庭に配布したり、福祉施設との交流、地域内の機関との連携活動、小学校や高校との連携、アジア大会でしおり作成配布、親善アルバム発送、一円募金、バス停の清掃など様々な活動の報告が行われた。最後は、今後の活動として、幼児のみならず職員の心の中に生涯にわたる定着をめざすということで締めくくられた。

●田川小学校の実践よりと題して元庄原市立田川小学校校長　河戸靖子氏の発表

学校教育全体構想のきめの細かい説明に始まり、青少年赤十字との関わり、福祉教育の捉え方など教職員の共通認識に向けての実践の説明があった。教科学習特別活動、道徳教育のなかに奉仕、健康安全、国際理解、親善などの盛り込み方を実例を上げながらの報告があった。

「心でつなぐ世界の音楽」を小学校の多目的ホールで開催したことについて、プログラム、児童の感想などを紹介された。また、学校だよりを通じて、青少年赤十字広島県大会に参加した様子、田川まつり、学校へ行こう週間、救急法講習会を日赤広島県支部の方を講師に開催したことなどを保護者に知らせているとの発表があった。力強いものであった。

●二〇〇三年度　活動内容・「気づき」「考え」「実行する」と題して広島県立宮島工業高等学校教諭近藤明弘氏の発表

一年間の行事としてヤングボランティア総会、フラワーフェスティバルパレード参加、大野みんなの祭りあじさいまつり参加、JRC高等学校協議会、大野町Jリーダーボランティア、街頭献血ボランティア、大野町子ども会リーダー研修、JRC広島県トレセン、広島県子どもセンター祭り…その中で大野みんなの祭についての取り組みをビデオをもとに分かり易く生徒たちが苦労しながら、企業とタイアップして、作品を完成していく様子が紹介された。クラス全員で、労を惜しまず、時間を考えず、夢中で取り組んでいく様子は、若者らしく、また、ボラ

ンティア精神がにじみでていて、皆、感動をしながら見入っていた。

現状報告

●赤十字の国際活動と題して、この度、日赤本社から転勤でこられた広島県支部組織振興課振興係長の角田敦彦氏の報告

アジアにおける人道危機には次のようなものがある。

(1) 湾岸戦争、イラク戦争などから

①捕虜の問題（虐待の禁止）、②人道支援団体への問題（赤十字への爆破テロ）③占領軍（住民に対する食料、医療、健康、衛生）④環境破壊（石油流出、海洋汚染、地球温暖化）

(2) イラン南東部地震から

地震などは現地の赤十字が中心となるのが原則、したがってイラン赤新月社活動が中心となった。が、多くの国が草の根ボランティアをおこなった。日本も要員として行った。国ごとに役割分担をした。

(3) その他として

①少年兵（十五才未満禁止、従順、安い賃金、心にキズ）②対人地雷（除去に多くの時間と費用）③戦争による犠牲者（軍人より民間が増えてきている）

人道法（ジュネーブ条約）の普及により、犠牲者を減らすことができる。

生々しい現状の、分かり易い報告であった。

賛助奉仕団の加盟校訪問

光本　吉伯

熊野町の加盟校は、幼児教育二園。小学校三校、中学校二校、高校一校、計八校である。加盟促進の取り組みから実施したが、さほど難しい問題はなく、比較的に容易に加盟を承諾してくれた。しかし、それを持続することはなかなか安易ではない。それは、実践活動を続けることに課題が多い。その一つは、JRC活動といまブームの福祉教育との関連である。どこが同じで、どこが違うかである。人道の理念を明確にしない取り組みはJRC活動が福祉教育に埋没してしまう可能性が生じる。二つ目は、各校ともJRCの活動費をもっていないことである。トレセン参加の費用など全く持っていない。その対策として、ボランティア団体やライオンズクラブの援助や町の青少年育成費などからの捻出を考えたが最終的には、日赤広島県支部熊野町分区に支援をお願いすることにした。分区に対して、当面する教育課題とJRCの実践活動について説明をし、幸いに理解と援助を得ることができた。今年で四年目であるが、毎年、書類を何枚も提出して十万円前後の補助を受けている。この費用はトレセンの参加費と加盟校の交流費として支出している。三つ目の課題は校長、教頭、担当者との交流をすすめることである。指導者のJRCへの疑義は加盟脱落に直結してくる。したがって、出来るだけ話し合いをして、学校の実践を評価しつつ、悩みを聞き展望を見つけ出す努力が必要である。

今年度、熊野町の加盟校において、い

ろいろな課題が生じているように感じた。できるだけ早く取り組みをすることで、新しい方向を見つけ出す必要を考えていた。このたび、塚本会長、田中副会長、射場先生、世木田先生の理解を頂いて、学校訪問を行うことができた。先生たちの協力に深く感謝をしている。

資料

熊野町トレセン参加状況
平成13年
小学校17名
中学校 3名
平成14年
小学校11名
中学校 3名
平成15年
小学校19名
中学校 4名
平成16年
小学校14名
中学校 4名

会員だより

赤十字幼児安全法講習会を終えて

広島市立山本幼稚園長　宮崎　礼子

幼い子どもを持つ保護者はけがや事故等に会わないで、健やかな成長をといつも願っていますが、一秒を争う不測の事態に備えて多くの知識を得ておくことは大変重要なことだと考え、本園ではＰＴＡ研修の一環として、赤十字の協力を得て、幼児安全法講習会を開催しています。今年も赤十字救急法指導員の西本先生をお迎えして、心肺蘇生法と、熱中症予防・傷の止血法等、身近な事故の対処法について学ぶ機会をもつことができました。

模型を使って参加者全員が一斉に心肺蘇生法の研修を受ける等、様々な講習を終えた保護者の心構えは大きく変わるものだったようです。「日頃起きやすいけがの応急手当の方法を知って大変参考になった。」「救急車が到着するまでのわずかの時間の心肺蘇生法の重要性を知り、もっと多くの人たちに覚えてもらうために是非毎年開催してほしい」等の声を寄せていただきました。大切なことは、いざというときに慌てないこと、そのためには事故が起きた場合にとるべき行動をしっかりとイメージできることや、一人一人の的確な判断と応急手当が大きな力となるということなどを確かめ合うことができたと、その成果に喜んでいます。

また、歴代の保護者の皆さんが、託児ボランティアの協力をしてくださったおかげで、未就園児をもつ保護者も共に、幼稚園という身近な場所で、親しい仲間と気軽に講習が受けられたことは本当にすばらしいことです。一人でも多くの人がいざというときに、互いに助け合える知識と技術をしっかりと習得することが、人とのつながりや人を思いやる心を育てることにもなると考え、これからも講習会を通して意識の高揚が図れたらと願っています。

いま、子どもたちは

田中　博

ＪＲＣ加盟校である広島市立山本小学校に、亀宝真由美先生を尋ね、活動のようすを伺いました。

「福祉教育に取り組んでおりますが、JRCをとおして児童の動きが変わっていくのがわかります。」との話でした。

具体的活動は

※高齢者との交流（老人会）

一・二年生は、睦会（老人会）の方と、昔遊びやリサイクル工作等を共にする中で、交流を深めていった。高齢者の知恵に学び、温かさにふれ、子ども達は心豊かなひとときを過ごすことができた。二年生は、交流に保護者も加わり三世代交流もすることができた。

また、月一回土曜日に開かれる高齢者の集い「いきいきサロン」に六年生がボランティアで参加し、ゲームをしたり談笑したりしてふれあいを深めていった。年度始めに地区社協と一緒に活動できることの一つとして計画し、最初は教師が引率して参加していたが、今では、児童が自主的に参加している。ボランティアをしながら、求められている自分の存在を再確認することができ子ども達は、生き生きとし、他の生活面でも積極性がでてきた。高齢者にも喜んでいただき、自分達も楽しんで参加している。

※「知的障害者入所更正施設いくせい」との交流〈六年生〉

運動会で〝よさこいソーラン〟を踊ったのをきっかけに、この踊りの練習をしていた〝いくせい〟との交流が、五年生の二学期から始まった。来校されたり訪問をしたりして一緒に踊る中で、自然な交流ができ、踊る仲間としてお互いのよさを感じ取ることができた。

十一月には保護者も一緒に交流した。踊りを通して心がひとつになり、笑顔いっぱいの温かい雰囲気で交流を深めることができた。

こういう活動を通して、自分を大切にし人を大切にする、共感・共生のできる子どもに育ってほしいと願っている。

田川小学校教育研究会に参加して

大木　昭

庄原市の郊外を流れる西城川の支流濁川べりの丘に建つ田川小学校。秋雨の中に玄関を飾る菊やベゴニアの鉢。子どもたちの丹精がうかがえる。

算数の授業を参観した。どの教室も二・三名ずつの複式授業であるが教科と特活それぞれの特性を最大限に生かしながらも美事に融合し、子ども一人ひとりが最大限に力を出し切って活動している姿に感動した。

児童会活動の集会活動に参観者がいつの間にか参加者になって本気でジャンケンをしていた。JRCが血や肉になった学校を見せていだいた。

気づき、考え、実行する「霞フラワーガーデン」花づくり

松尾　昭彦

七年前、霞町町内会が、広島市から、霞・庚午線道路予定地の一区画を借用して、町内美化の目的で花づくりを始めた。

一鍬入れたとたんに、作業の困難に直面した。石とコンクリートで固めた宅地跡を花が育つ柔らかな土に変える仕事。つるはしやのみまで使って10cmまた10cmと汗を流した。

畑の隅にきれいに積まれた石の山が物語る。欠かせない水を百米先の集会所から引く苦労は今も続く。

『ボランティアで育てる、霞フラワーガーデン、毎日曜日午前九時～十時、とび入り歓迎』の看板で広く知られ、道しるべにもなっている。

発足以来、作業を進めるための、割り当てや当番が無いこと、指示、命令が無いこと、それでいて、実にうまくいっていること、が特徴である。ニードを受け入れた行きたい人が、行きたい時に行き、畑も観察し、自分でしたい作業を実行し、帰りたい時に帰る、というのが作業の基本となっている。やりたい作業をやる心とニード（必要性）を満たす心が調和して意欲的な行動となるのだろう。

自然の成りゆきで、それぞれの人が、得意な作業分野を進んで担当されるようになった。石工作業、土壌作り、花種選択、播種育苗、除草、防虫、引水、花札書き、畑の図面描き、写真撮り、等々くろうとはだしのおはこ（十八番）披露会である。打ち込んだ仕事は、可愛いく楽しみなのだろう。雨の中、傘をさして見守りに来る程である。それぞれにとって、「おらがフラワーガーデン」である。

ティータイムは、何でも話し合える場であり、年一、二回の「花づくりを語る会」ではせんべいをつまみ、コーヒー片手に笑顔の花が咲く。

考えてみると、国泰寺中学校時代、JRCトレセンで、皆がリーダー、皆が協力者でボランティアサービスを実践して行っていたことが、役立っている。赤十字精神が、静かに私の心に宿り、今こうした形で地域にかえすことが出来ていることをうれしく思っている昨今である。

私と赤十字

宗本　正記

私は現在地元から要請を受け、町議会議員二期八年と一か月の生活の中にありますが、私に赤十字の心がなかったら、外から見る議会と内に入って見る議会人の姿に、あまりにもの違いのショックで、現在迄を乗りきることができなかったのではと思っているこの頃であります。

議員同士での寝わざ・足わざ・言動の表現の違い。

人道の旗のもとで、奉仕、国際理解、親善等の赤十字の心とは大きくかけ離れた生活であり、時には相反する人道の敵である独断と偏見のうずまく環境の中にあっての生き甲斐は、赤十字の心にあったからと思っています。

議会人から、また一般の人からお人好しの議員との評価もあるようですが、私はいつも赤十字の心を生活の基盤にしていますので、一向に気にしない生活であります。

私の心の基盤となっている赤十字との関わりは半世紀以上に到っています。

前置きが長くなりましたが、私の赤十字との出合いは、昭和三十五年、大和町

の椹梨小学校当時、松浦定一校長のもとで加盟と同時に主務担当者に任じられた時でした。

校庭にアンリー・デュナンの像の造立を手始めに、御殿場での中央研修会に参加、県大会には毎年児童代表と共に参加、特に府中南小学校でのトレーニングセンターにスタッフとして参加した想い出は強く残っています。この反省から「ホームグランドを持つべし」と当時の神田中学校におられた岡田孝裕氏の発起で、スポーツセンターの建設に参画しました。このセンターは現在も利用されており、先般久方ぶりに激励を兼ねて挨拶に立ち寄らせていただくと、私の清武西小学校時代初任者で、青少年赤十字に熱心であった川本（旧姓金行）和暁先生が芸北町立雲月小学校の校長になられ、スタッフ責任者として参加、活躍しておられる姿に喜びと感動を覚えました。

また椹梨小学校で初めて県内外の先生方の参加を得て、青少年赤十字研究会を開催し、主務者として実践発表をさせていただいたことも大きな想い出の一つであります。

次の和木小学校でも、同僚の理解を得て加盟し、ダム祭りや花火大会またその後の清掃活動に取り組んだ思い出。

神田西小学校では、県へき地・小規模校研究会の開催で郡内の先生の参加以外に、広島大学教育学部の先生方数名と三十数名の学生さんが視察を兼ねて参加くださり、ここでも主務者として青少年赤十字の実践発表をさせていただいた記憶があります。

次の和木小学校では、加盟した当時、教育界の思潮に奉仕という言葉に対する抵抗の風潮があり、活動に停滞を来していましたが、それでも先生方の熱意ある協力により、校内トレセン等は実施できました。

もっともこの学校在職中は、仏教大学専攻科（通信制）の学習と文部省教育課程実践発表（社会科）で一週間の上京、さらに文部省中央研修講座（筑波大）で四十日間の研修受講という私自身のことで存分に活動できなかった記憶があります。

五十二年から五十六年の五年間は豊栄町の安宿小学校で、六年生の担任も兼ねて教頭として勤務しました。そのうえ、文部省の海外派遣団員としてヨーロッパの諸国を三十五日間かけての研修しましたが、ここでは子供神楽の結成、郷土史研究会や町P連事務局を担当しました。PTAと合同で青少年赤十字研修会を開催し、同日合同でキャンプファイヤーを実施しています。

五十七年から四年間は清武西小学校に在職し教頭一年で校長に昇任。ここでは地区内の中、高校生の会を結成し、児童とPTA三者でトレーニングセンターを開設。さらには佐木島の小学校、神田西小学校の児童を招待し、合同トレセンを実施し、佐木島でも児童全員とPTA全員で合同トレセンに参加しています。

これら青少年赤十字の諸活動実践と県福祉協力校、愛島モデル校、全銭教育推進指定校として、多面にわたる活動を地域と一体となって推進した懐かしい想い出もあります。

六十一年からは教職最後の学校となりました和木小学校での在職でしたが、ここは初任の時三年間、中途でまた三年間勤務し、ここから教頭で転出しましたが、今度は校長として帰任。初任者の時に担任をした児童がPTA会長、副会長、各部長。昔PTA会員であった方が老人会会長、議会議員等の有志。本当に恵まれた環境でありました。

県福祉協力推進校としての活動は老人会や福祉施設の園生との交流活動、地域出身の中国残留者の一時帰国者の招待、カナダ、オーストラリアからの留学生を

招待しての交流活動の開始。また青少年赤十字の研究推進校の指定を受け、国際交流活動として六十三年には、広島県知事部局国際交流室と日赤広島県支部の支援により、中国四川省成都市人民北路小学校との友好親善交流校として調印式が行われました。

調印式には県知事部局国際交流室長、県教育委員総務課長、大和町長、教育長、教育委員、日赤広島県支部事務局長、町議会議員、総務文教委員長、地元議員、公民館長、ＰＴＡ会長ほか多数のＰＴＡ会員、各種団体役員等多数の出席をいただき開催ができたこと、加えて児童の郷土演劇発表には好評をいただきました。

次の年には中国四川省政府幹部の付力賢氏、張建国女史により人民北路小学校からの調印状を持参し、来日来校され、ここでも前回同様の盛大な歓迎式典とパーティーが開催されました。

八月には、四川省から少年団二十名が来校し、初めて接する中国児童たちによる日本語でのあいさつと日本舞踊の演技のすばらしさに、中国のエリート校のすばらしさを感じました。

和木小学校四年間は青少年赤十字の国際親善活動以外に福祉協力校として施設の園生との交流活動や白滝湖周辺のあき缶拾いや花火大会の後始末等地域の方と一体となって活動できました。

これらのことからか、日本赤十字社から表彰を受け、大変恐縮した記憶はまだ新しいことです。

このことから退職後直ちに同志に語らい、赤十字奉仕団一分団と二分団を結成し、さらに日中親善協会を設立し、カンパによる中国児童の招待でのホームスティの実施や二度も成都市を訪問し、友好親善を深めて来ましたが、本年度も訪中団を結成し、友好を温めたいと張り切っています。

また、多忙な議員生活の中にあっても今日まで週二回老人会の健康体操教育やスポーツの指導にとび廻っているのが現状ですが、来春三月で議員生活は終わり、真夏のトレセンスタッフ生活の思い出等を胸に、また時折活力を与えてくださる賛助奉仕団委員長さんを始め、懐かしい方々による賛助奉仕団の研修会を楽しみにしています。

おわりに、かつて青少年赤十字において活躍された方々に地域奉仕団結成を期待し、日赤との絆を続けられるようお願いします。

「子ども俳句ボランタリー」

庄原市
河戸　靖子

。母さんがゆでたコーンを父さんに・三年。夜祖父が編んでいたよ中連縄を・五年。稲刈りの終わった父にビールつぐ・四年

「河戸先生早う俳句を作ろうや。」と私が俳句ボランタリーをしている小学校へ着くと子どもたちが窓から口々によんでくれる。

退職後、青少年赤十字加盟校から声をかけていただき、子どもたちの俳句作りのお手伝いを月一回させていただき、二年目になる。子どもたちのまなざしは新鮮でするどい。

郷土の式の推移を見つめ、家族のいつくしみあう姿を次々に俳句に詠み、俳画に描く。

その作品は、地域のお年寄りに届けられる弁当の表紙に印刷され、毎回違う表紙に大変楽しみに待っていて下さるそうだ。今年はうちわにも印刷され、多くの方に喜んでいただいた。

加盟校のお役に立てるのはうれしい。

筋ジスの青年たちと「源氏物語」を読む

平成十六年七月　石田　民生

井上さんたちのお世話で、廿日市市にある国立原療養所（原病院）に月に一度行き、筋ジストロフィーの青年達と古典を読みはじめて、はや丸六年が過ぎた。七人集まった青年たちは一人が三年目に急死し、一人は退院して五人になってしまった。車椅子で元気よく走りまわっていたI君も二十六歳になった今は、酸素吸入器をつけたまま、ほとんど寝たきりになっている。元気だったK君もS君も寝たままの状態になってしまった。

しかし亡くなったM君と他の三人は、詩や短歌を少しずつ作っていて一九九九年春には「四色パステル」という小冊子を発行、中国新聞にも大きく取り上げられた、実力者たちである。

その頃は講堂の隅の一室で七人の集会所のようになっていた。「今昔物語」の短編を読んで、それぞれ疑問を出し合うと一時間はすぐ経ってしまう。五人は、読んでゆく短い話に飽きたらず「何かまとまったものが読みたい」という。あれこれ候補が上って、「源氏物語」に落ち着いた。「ポイントだけでいいです」という五人の希望で、三年（M君死去のあと）に第一帖「桐壷」から読み始めた。ポイントになる本文と訳とをB四用紙一枚にはめる仕事は私が引き受け、必ず絵を添えてわかりやすくした。天皇を中心にまとまっているはずの皇室が、意外にも古女房中心で、天皇も遠慮なさる場面などもあって興味は尽きない。

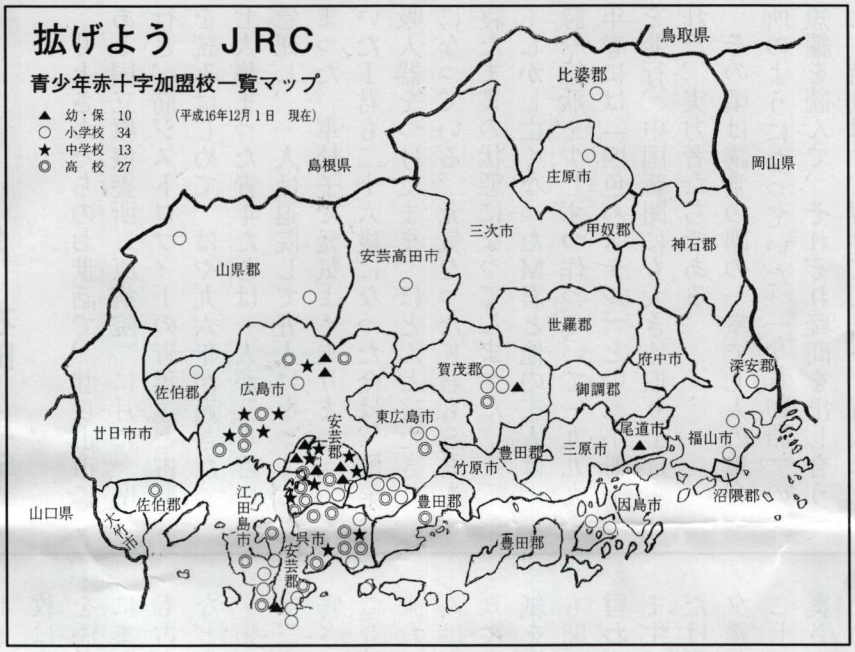
先日（二〇〇四年六月）面白かったのは三十九帖だった。「夕霧」の巻で、（夕霧さんは源氏の一人息子だが）奥さん（雲井雁）には頭が上がらない。夕霧に来た、よそのおばあさんの手紙を、奥さんは恋文に違いないと腹を立て、こっそり後ろから近づいて主人の読んでいる手紙を取り上げる。そして主人の言うことも聞かず一方的に攻めあげる。「文句を言わずに死んでしまいなさい。私も死にます。あなたを見ると憎らしくなるし私だけ死ぬのは気がかりですから」と怒る。夕霧さんは「マタハジマッタ」とにこにこしている。しばらく言い合いをしたが、奥さんもだんだん気持ちが納って「ひどいことを言ってごめんなさい」と謝る。こうして二人はまた仲よくなる。…こうして二人はまた仲よくなる。…というような筋書きが「夕霧」はじめ、他の場面にも多い。

十世紀前の源氏の作者「紫式部」に、二十一世紀を生きる私たちが操られている感じになるのも不思議である。あと一年足らずで「源氏」も終り、原病院も解体され、百何十人かの筋ジスの青年男女も大竹病院やその他に、バラバラに移っていくらしいが「今昔」や「源氏」を読んだ青年たちの経験は生涯忘れられないものになっていくに違いない。

雲月小学校教育研究会に参加して

塚本　晃史

晩秋の十一月二十六日山県郡芸北町立雲月小学校（川本和暁校長）において青少年赤十字活動教育研究推進指定校としての研究発表会が開催され、私達奉仕団五名が参加した。「豊かな心と表現力の育成をめざして」を研究主題として英語教育を授業に取り入れ、児童全員によるオペレッタ「獅子の笛」の発表等、参加者一同大いなる感銘を受けた。



編集後記

「賛助ひろしま」第十号をお届けします。

原稿をお願い申し上げた方々には快く承諾の上、早速、寄稿してくださり、本当にありがとうございました。さすがＪＲＣの仲間だと改めて感じました。

十月二日から三十一日まで「赤十字写真展～人道の記憶～」が平和記念資料館において、国際赤十字、在日スイス大使館などの主催。広島市、日本赤十字社広島県支部の共催で開催されました。

賛助奉仕団も積極的に協力し、期間中、県支部職員や地域奉仕団の方々と一緒にボランティアとして、会場受付などに携わりました。

来場者は外国の方も多く、また、修学旅行シーズンでもあり、全国各地から高校生、中学生、近隣各地から訪れた小学生たちとの触れ合いも楽しむことができました。

（写真は開会行事のテープカットの場面です。）

編集委員
石田民生　井上敬二郎（編集委員長）
大木　昭　世木田寛子
田中　博　中村タミ
塚本晃史（県賛助奉仕団委員長）

今年は近年希（まれ）な災害の多い一年間でした。来年は平穏な年でありますよう念願し、皆様方の佳きご越年をお祈り申し上げます。

（井上）